

一時は学校へ行くのもいやになったこともありましたが。学校よりも野山で何かを取っているほうがとても楽しいものでした。母は病弱でしたので、祖母が母がわりになんでもしてくれ、やさしい人でしたが、それに対して、父はとても厳しい人でした。

毎日の食事は代用食が多く、雑炊、お粥といつても名ばかり。ご飯粒なんて数えるほど、あとは野菜、かじめ等。その中からご飯粒を箸ではさんで子供達の茶碗に入れてくれる母のか細い手、なんでも自分が食べずに子供達に食べさせてくれた母は引揚げ三年目、私が十四歳の時心臓発作で亡くなりました。三十五歳でした。亡くなる前に、私が一・五キロぐらいの病院まで一生懸命に走って先生を呼びに行っている間のことでした。夫や子供達にも看取られず、淋しくこの世を去りました。あの時、医者ももう少し早く来てくれたなら、長生きできたのでは、と今でも残念でたまりません。

母が亡くなってからは、父の生活は乱れ始め、職をさがすと東京へ出て行ったきり、所在不明のありさま

でしたが、二年後元気で働いていることがわかり、ほっとしたものです。そして私は就職し、お友達ができ、すこしずつ楽しい日々が続くようになり、引揚者としての淋しさから逃れられるようになりました。

遠きに在って想うものは祖国

東京都 二瓶 忠 雄

昭和二十二年一月八日の朝、曇り空から時折り陽がほのかにもれて海面に映える肌寒い中、台湾基隆からの居留民僑一千余人が、引揚傭船撰津丸のタラップを下り、はしけに乗り移った。その中に私達家族八人が「今度こそほんとうに内地の土を踏めるのだね」と確かめ合いつつ、期待と不安の入り混じった顔を見合せ、青味がかつた遠景の中に浮かびあがる九州佐世保の町並みを見つめていた。思えば、台北市の家を、そっくり旧知の台湾人に明け渡して出て来たのが十二月十日の昼過ぎ、実に一か月におよぶ祖国への旅路であった。

携行手荷物の持ち出し限度は、一人につき竹行李三個まで。この二十四個の中に、在台二十数年のキャリアを圧縮・梱包することは不可能で、両親も中味の選択には苦勞し、涙したことだろう。しかし、十二歳の少年だった私にとっては、もう再び訪れるとは思えない生まれ故郷との別離、ここに至るまでの「記憶」そのものが、私が持ち帰れる唯一のものになったのである。

リュックを背負った私達が、台北市の児玉町大通りのバス停の角にさしかかると、近所の顔見知りのチャボランに行きあつて「リー、ベエキタウア」（皆さんお出かけ）と氣さくに挨拶されたが、母が淋し気な笑顔で黙って頭を下げるのみだった。

引揚者はいったん新公園の広場に集結、手続きと班編成の後、一団となって台北駅へ、基隆港内検査所でただちに、手まわり品と先着の携行荷物の受領確認開梱検査とつづく。これらの立合い作業には、一家の男手がかり出された。これと並行して実施された本人チェック（密出国防止）で、伝染病グループが摘発され

たとのことで乗船延期となった。だが、関係当局の詳しい説明は一切なく、また、乗船予定の船台南号（戦標船五千トン）は、入港した様子もないことが、引揚者有志の調べでわかつた。話を聞いた兄が岸壁へ雨をういて何度も見に行つたが、船は来ない。関係当局の意図的な何かを子ども心に感じ、それが敗戦国民の悲哀かと納得した。

台湾北部の雨期は、十二月から二月頃まで続く。雨が連日降り、絶望的な待機生活が輸出倉庫内で始まつた。台湾側から朝と夜の二度、給食が出る。台湾在来米の飯と白菜の浮いた醬油汁の毎日では氣が減入る。手持ちの缶詰も底をつきかけたが、外部への買い出しの自由はない。

霧雨の中を、氣晴らしに岸壁へ出てみた。人影はない。昨日まで停泊していた貨物船も今はなく、ただ波がゆれている。はるか向かい側の突堤附近に、戦時の沈没艦の赤錆びた残骸が、時おり風と波にあおられて、大きなキシミ音をたてる。それは何故か、苦しがる牛のものの悲しい鳴き声にも似て、涙が港全体を覆ま

せた。

一週間が過ぎた。南方区域の復員船撰津丸が台湾に向かっているという朗報がもたらされ、湧き立った。つづいて、乗船日も十二月二十七日と決まった。

乗船二日前の昼に、一人の台湾人が査証を取って父に面会にきた。荷物の整理でこたがえしている中で、両手に差入れ品をいっぱい持って父母に挨拶していた。聞けば総督府の父の同僚で、噂をきいて別れを言いに来たとのこと。差入れ品は、豚の塩茹で、台湾餅、漬物、菓子類等、多彩なご馳走を、同班の人びとを呼んで皆でむさぼり食べた。

乗船当日は、朝から雨足強く、荷役仕込み作業はかどらず、携行荷物の積み込みが夜半までかかり、男達は疲労気味。各班ごとのごろ寝の座席は夜半過ぎても整備されず、決まった順に死んだように寝入った。私達女子どもも手まわり品の見張りや、伝令等で意気消沈であった。

出船はパイロットの都合で、翌二十八日正午になった。給食が船内食に代わり、朝九時と夕方四時の二回、

麦飯、魚と野菜の煮込みが主で、基隆より質が上がった。

出船の見送りは、関係者数十人と数本の紙テープ、物憂げな重苦しい汽笛が響いて離岸、空はあい変わらず鉛色、ながらくなじんだ台湾の太陽もついに、顔を出すことなく別れがきた。いろいろな思いが、一気に頭の中を通りぬけ、息が止まった。側で大声を上げる老人、兄はキッと空を仰ぐ。父母と姉達の姿は見えない。涙ですべてがおぼろ気に見える。突堤の赤い標識も次第に遠ざかる。

気がつくと、泡立つ海面は、青黒く変わって目前に迫る。本船はすでに港外に出て、速度を上げながら、北東の祖国日本に向かっている。北西の風が強く、ローリングが激しい。巨大なエレベーターに乗せられた感じだ。急に胃がむかつき、息苦しくなる。夢中で船倉のねぐらに戻り、そこで意識が途絶えた。

船は二日間激浪と戦いつつ航行を続け、三十日、佐世保に着いた（ちなみに旧内台航路では、通常三日はかかる）が船内検疫で又もや引っかかり、さらに九日

間の船上生活を、余儀なくされた。

帰郷一回目の正月を、船で迎えたのも、生涯忘れ得ぬ体験となったのである。

小学生の終戦

東京都 平山純子

私が台北市立幸小学校第二学年の夏、第二次世界大戦が終りました。

小学校に入学したのは、昭和十九年の四月でした。母に手をひかれ入学式に出席した時の思い出は、今もあざやかに胸にきざまれております。まず、第一に、学校の門に揚げられた大きな日の丸の旗が春の暖かい風に吹かれ、小さな音をたてて私たちの入学を喜んでるようでした。

式場で、山本校長先生が「立派な日本人となり、お国のために役立つようになるように」とおっしゃった言葉の深い意味は十分理解できませんでしたが、先生

方が、私達に何か望んでいらっしやるようだとは、強く感じました。そのあとで受け持ちの先生の紹介があつて、いろいろと教えていただき、毎日の通学が何よりも楽しくなりました。

二年生になって間もなく、幼児のいる家庭の疎開の命令が下り、台北第三高女に勤めていた母の教え子の家にお世話になることになり母、弟妹三人、従姉と私の六人で移らせていただいたのは、昭和二十年の二月であつたと思います。

疎開地の三峽は、空襲は受けなかつたけれども、台北空襲の米軍機が上空を通過するため、学校は授業休止、退避ということが多くなり、授業ができるという希望はついに叶わなかつた。

二十年六月二十一日、まだ二歳にならない妹の佳子があつた風邪がもとで、たった一晚のわずらいで、疎開病院で急逝し、母と私たち姉妹は悲しみの底に沈んでしまいました。

疎開していた陳家の中学生の坊やが、終戦の日から私たちに熱心に台湾語を教えようとしていることに気